



### 多言語体験

たげん ごたいけん

平田オリザ

ひらた

いま私は、仕事柄、言葉について、日本語について、文章を書いたり、あちらこちらで勝手なことを喋ったりしているが、その内容のほとんどは、二十代の前半に韓国に留学した時の語学体験がもとになっている。

私は交換留学生として、午前中は、大学内にある韓国語学校に通っていた。しかし同時に、クラス内の落ちこぼれ学生たちの家庭教師もしていた。いま考えるとおかしなことだが、韓国語を学びはじめて数ヶ月で、韓国語を外国人に（いや、私も外国人だったのだけど）教えていたのだ。

韓国語学習は、欧米人に比べ、日本人が圧倒的に有利である。いまは私の母校でも、日本人、在日韓国人と、欧米系の学生は分離して授業を進めているようだが、二十年前は、両者が同居していた。この学力差は、たいへんなものがある。しかも、教室の中の日本人で、英語を喋るのは私だけだったので、結局私が、韓国人の先生が言っていることを通訳するはめに陥った。まあ、小中学校の時に、ませた子どもが、同じ班の、少し勉強の遅れた子どもの面倒を見るといったことをイメージしてもらえばいい。一番、私の世話になった

のは、フィリピン人の中年神父だった。

しかし、このことは、私の韓国語の習得の速度を倍加させた。やはり他人に教えると、自分にとっても大いに勉強になるものだ。

さらに私の言語生活は複雑化していった。

私は留学生用の学生寮に住んでいて、昼食はそこに戻ってとることになっていた。この昼食の時には、アメリカ人の大学院生に、漢字を教えることになった。その代わりに、私の英語の発音もチェックしてもらった。

午後は大学の授業があり、これは、英語のものと韓国語のものを両方受講した。英語で韓国語の歴史を習うと、これはこれで客観性を持って新鮮な感覚があった。

放課後は、韓国人の学生に、ボランティアで日本語を教えていた。ここでの使用言語は韓国語である。一日おきに、学生への、韓国語による日本語教育と、先に書いたクラスメイトのフィリピン人神父への英語による韓国語教育が続いた。この神父さんは、米軍基地でミサをあげるのが仕事なので、彼のマンションには、基地からもらってきた大量のステーキやワインがあり、私は授業のお礼に、それらをたらふく食べ、飲ませてもらった。

私の韓国語の記憶は、厚切りステーキと赤ワインの味と結びついている。

(劇作家・演出家)

あじむす